みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

ブリコラージュ実践の共同体：マダガスカル、ヴェズ漁村におけるグローバルなフローの流用

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2015-11-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 飯田, 卓 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/4803

ブリコラージュ実践の共同体

——マダガスカル、ヴェズ漁村におけるグローバルなフローの流用——

飯田　卓*

グローバリゼーションが日常化していくなか、個人と世界を媒介する共同体の役割があらためて見なおされつつある。本稿では、マダガスカル南西部ヴェズ漁師の漁法開発と漁撈実践をとりあげ、閉鎖的でも脆弱でもない共同体のありかたを考察した。

ヴェズ漁師たちは、手もちの素材や道具、技能、実践経験を適宜組み合わせながら漁法開発をおこなう。こうしたブリコラージュは、不断の状況変化のなかでくり広げられる漁撈実践の延長である。つまりヴェズ漁師の漁法開発は、ルーティンの図式とともに状況対処能力を習得できるような正統的周辺参加にもとづいているのである。このように実践をとおして状況対処能力が得られるような共同体を、本稿では「ブリコラージュ実践の共同体（CBP）」と呼ぶ。CBPは、グローバリゼーションという状況のもとで、通常の実践共同体よりも柔軟に変化するが、実践共同体の性格を有するがゆえの限界もある。その限界をふまえつつ、グローバリゼーションという流動的な状況のなかで共同性を創出していく試みは、文化人類学の重要な主題となろう。

キーワード：実践知，正統的周辺参加，共同体，漁撈，マダガスカル

目　次

Ⅰ　序論
Ⅱ　民族誌的事例：ヴェズ漁村社会
　1　ヴェズ漁師
　2　漁法開発1：銛銃の自作
　3　漁法開発2：網漁の改良
　4　漁法開発3：イカ擬餌鉤の自作
　5　漁法開発4：電灯潜り漁
Ⅲ　ブリコラージュ実践の共同体（CBP）の諸側面
　1　ブリコラージュによる漁法開発
　2　集合的現象としての漁法開発
　3　正統的周辺参加
　4　状況対処能力の習得
Ⅳ　グローバリゼーションのただなかのCBP
　1　グローバルなフローを資源とする自己組織
　2　CBPをおびやかすグローバリゼーション
Ⅴ　むすび

* 国立民族学博物館　E-mail：iida@idc.minpaku.ac.jp

I　序論

グローバリゼーションが進展し、共同体の役割が見なおされつつあるなか、閉鎖的でも脆弱でもない共同体のありかたが、近年になって模索されている。本稿では、オートポイエーシス的なプロセスをそなえた共同体（本特集の湖中論文を参照）をひとつの理想とみなし、その実例として、グローバルなフローを流用しながら漁法開発実践をおこなうマダガスカル南西部ヴェズ人の漁法開発実践を分析する。この作業をつうじて、グローバルなものがローカルなものを同化してしまうという見かたを拒否すると同時に、グローバリゼーションを安易に歓迎する姿勢もしりぞけて、グローバル対ローカルという二項対立を乗り越える視点を示すのが、本稿の目標である。

因習や束縛といったネガティヴな側面にも関わらず、あえて共同体[1]に目を向けなおすことの意義については、「共同体という概念の脱／再構築」という特集を本誌で企画した小田［2004］が述べている。彼はまず、政治哲学の共同体概念を整理し、市民の自立や公共性の確立を阻害するものとして共同体がとらえられてきたと指摘する。しかしそうした概念規定は、かならずしも、現実の人びとの生活実践にもとづいたものではない。また、共同体概念を否定し、「共同体」と呼びならわされるさまざまな社会的紐帯をすべて分断してしまえば、後に残るのは、「孤独な群衆」以上に不安を抱え、全体主義的なものに拘束されやすい「浮遊する孤独な個人」しかない。そこで、政治哲学で論じられている共同体概念を脱構築し、現に「共同体」と呼ばれているものを未来に活かす方途を検討しつつ、あらたな共同体概念を再構築することが必要である［小田 2004］。

こうした小田の提案は、共同体の現在とポテンシャルを、現代的文脈において問いなおすことにつながる。その意味では、「共同体」特集とならんで、同じく本誌で特集された「ネオリベラリズムの時代と人類学的営為」の諸論文も重要である。特集企画者の松田［2009b］は、「市場と個人を直結させ、その中間にある集団（国家も含まれる）は生活世界から退却させていくウルトラ市場主義」が力をもつなか、「市場と直結した流動化する諸個人という分断状況と、その中間で一時的に膨張する国民共同体の束縛と排外主義を、同時に克服する」ために、ネオ文化相対主義にもとづいた共同性を確立しようとする。こうした共同性の問いなおしは、グローバリゼーションという文脈との関わりでも試みられるべきだろう（本特集の川田論文を参照）。

小田の問いかけに対して、植村［2004］は、フランスに住むマグレブ系移民二世が多様なかたちで「われわれの共同体」とつながっていることを指摘する。それによると、挨拶だけの希薄な隣人関係が卓越する大集合住宅地区ですら、対面関係にもとづく相互の〈つながり〉が維持されており、そこを出てフランス人のなかで暮らすようになった人たちも、血縁にもとづいた対面関係などをつうじて「差異を含みもつ〈つながり〉としての共同体」を生きている。また松田［2004］によれば、個人にとって共同体はリアルで持続的な存在だが、一方で、共同体からの自己隔離を志向することもできる。共同体に居場所を求めるセルフとそれを拒否するセルフは、生活世界という場において相互に変換可能だし、内実に変異と流動性をもたせることも可能だという。

植村と松田が共通して指摘するのは、外からみれば均質で閉鎖的な共同体が、じつは周辺部などにおいて開放的な一面をみせるということである［小田 2004］。このことは、単一で固定的なアイデンティティにもとづく共同体がもはや存立しえない現代、あらたな共同性を構想するうえで貴重な示唆を与えてくれる。しかし本特集との関連でいえば、そうした共同体がいかなるかたちでグローバルなものと調整をはかる

かという問題については、かならずしも明示されていない[2)]。

この点に関して示唆的なのが、「ネオリベラリズム」特集における小田の議論［小田 2009］である。彼は、「二重社会」というアイデアをとおして、人びとがグローバリゼーションと調整をはかるやりかたの具体的なイメージを提示している。すなわち、ヌアー人が一般的媒体である貨幣を「ウシによるお金」「仕事によるお金」などに差異化するように、貨幣などのもつ一般的性格は、特定の操作によって人と人との個別な関係を築きなおす。このように「［非真正な社会に由来する］媒体や制度や観念を「一般性－特殊性」の軸から「普遍性－単独性」の軸へとずらす」点において、対面的に結びつく「真正な社会」の可能性があると小田はいう。

小田がとりあげた共同体は、植村や松田のように〈つながり〉をとおして広がっていくものでなく、むしろ、同一性にもとづく古典的な「共同体」の属性を多くそなえている。しかしそうした場でも、グローバリゼーションとの調整をはかれるのである。その条件を明らかにすることは、今後の文化人類学の大きな課題になっていくだろう。本稿ではさしあたり、ヴェズ漁村という「真正な社会」に目をむけつつ、グローバリゼーションとの調整をとおして共同性が創出・維持されるメカニズムを記述し考察したい。

Ⅱ　民族誌的事例：ヴェズ漁村社会

1　ヴェズ漁師

ヴェズは、マダガスカル南西部海岸に広く居住する人びとで、しばしば漁撈を重要な生業とする。初期の民族誌的著作は、漁撈という生業がヴェズと他の民族を区別すると述べ［Grandidier et Grandidier 1908：250；Koechlin 1975：23］、民族概念を相対化した近年の研究も、ヴェズのアイデンティティは海や漁撈と深く関わると指摘してきた。アストゥティによれば、ある人がヴェズであるかどうかは、その人の出自に関係ない。漁撈など、海で生活するために必要な振る舞いを身につけていればその人はヴェズだという［Astuti 1995］。筆者の経験では、「ヴェズである」という言い回しはしばしば「カヌーの操縦がうまい」「魚に詳しい」「漁がうまい」などの意味で用いられるいっぽう、ヴェズという呼称が他の民族呼称と対置されて用いられることもある［飯田 2008：89］。ヴェズはたんなる職業的カテゴリーではなく、海や漁撈との関わりをとおして得られる民族的アイデンティティなのである。

ヴェズが漁撈に依存する理由のひとつは、彼らの居住域に降雨が少なく、農耕がむずかしいからである。筆者が長期調査をおこなった村の付近では、年間降水量が500ミリメートルていどにすぎない。そうしたなか、サンゴ礁やマングローブ林の微地形に生息する魚類や甲殻類、貝類などは、通年的に安定した収穫物である。1960年代以前は、これを主食作物に交換する機会がそれほど多くなかったが、1970年代に貨幣流通量が増えて以降、また1990年代にナマコやフカヒレなどの海産物が輸出されるようになって以降、海での収穫物は容易に現金化されるようになり、漁村ではもはや農耕や賃金労働をおこなう必要がなくなった［飯田 2008］。

もちろん、何世代も前から都市に住み、政府機関やホテルで生計を支えるヴェズもいるし、海岸から離れた地域に住むため漁撈をおこなう機会が少なく、もっぱら農耕に依存するヴェズもいる。彼らはしばしば、自分たちのことを「まちがったヴェズ」と自認する。つまり、「ヴェズ本来の生業」と呼ぶべき漁撈から遠ざかっていることに対して、忸怩たる思いをもっているのである。この一事だけでも、ヴェズのアイデンティティにとって、漁撈という日常実践が大きな意味をもつことを理解できる。

ただし、ヴェズがアイデンティティの拠りどころとする漁撈は、多様な側面をもつ。さまざまな漁法だけでなく、魚の認知や潮汐の認知、

カヌーの操縦法など、個別の技能が「ヴェズであること」に深くかかわることもある。アストゥティもまた、漁撈のみならずカヌー建造の技能や水泳の技能、魚を高く売りつける能力などが「ヴェズであること」の証として語られることを指摘する［Astuti 1995：14-36］。こうした多様な能力に根ざすアイデンティティは、第Ⅲ章で述べるように、オートポイエーシス的な共同性と密接に関わる。

2　漁法開発1：銛銃の自作

筆者は、1994年以来約15年にわたってヴェズ漁村を調査するなかで、多くの漁法があらたに始まるのを目撃した。それにはさまざまな要因が関わっているが、多くの場合、マダガスカル政府の経済政策が海産物流通を活性化し、海産物の商品価値が高まったことが関連している。たとえば、世界銀行やIMFの主導する構造調整政策を1980年代にマダガスカル政府が受け入れ、関税が引き下げられて1990年代に対外貿易が活発化したとき、ナマコやフカヒレといったアジア向け商品の需要が高まった。調査地のF村ではこのとき、サメを捕るための大型刺網漁が始まり、同時にナマコの多い水域へ長期間出漁するようになった［飯田 2008：52-73］。

上記の事例だけをみると、F村の漁法開発は、東西冷戦の終結によるいわゆるグローバリゼーションの時期と軌を同じくしているようにみえる。しかし、おそらくそうではないだろう。聞き込みによれば、1970年代における貨幣浸透の時期、マダガスカル国内規模の海産物流通がうながされた結果、ナイロン網漁などのあらたな漁法が始まった［飯田 2008：195-209］。1970年代と1990年代という2つの時期の変化は、海産物流通の規模こそ違うが、ヴェズの生活感覚に照らして大きく違ったかどうかは疑わしい。以下で報告する漁法開発の不断さや巧みさは、なにも1990年代に始まったのではなく、1970年代頃から顕著になったと筆者は推測している。1990年代の経済的グローバリゼーションはむしろ、漁法開発を加速し、毎日の生活のなかで常態化させた点に特徴があろう。

漁法開発の実践に筆者が気づいたのは、1998年、3度めに調査地のF村を訪れたときだった。このとき見かけた木製の銛銃は、ひき金の仕組みなど細かな点がダイバー用銛銃と異なっていたが、ヨーロッパからのリゾート客が用いるダイバー用銛銃を模倣したものと見うけられた［飯田 2008：210-214］。1996年秋に村を訪ねたときには、こうした道具を誰ももっていなかったが、その1年あまり後には、潜り漁を得意とする未婚男性のほとんどが銛銃を片手に漁に出るようになっていた。詳しく聞くと、銛銃を製作する専門家がいるわけではなく、若者たちがめいめいにこの道具を自作するという。

銃身は1メートルあまりで、銃床（右手で握る部分）を削りだして猟銃に似せている（図1）。ただし、ひき金の構造は猟銃と異なるので、銃床は装飾の意味あいが強く、1本の角材でも銃身の機能をはたすことができる。この材の一方（銃口にあたる）に穴をあけて、タイヤで作った太いゴム輪を通す。ゴム輪は、伸ばすと銃床の上部に届くほどの長さで、銃床に届く部分はゴムでなくV字型の金属片になっている。この金属片は雨傘の骨を流用したもので、この金属片に銛となる金属棒をかけ、銃床の上に突起した釘に固定する。この釘のそばの木片をおさえると、テコの原理で金属棒が動いて金具からはずれ、ゴム輪の弾性によって金属棒が銃口から発射する。

材料として必要なのは、銃身となる木材とゴムタイヤ、雨傘の骨からとった金属片、釘、木片、輪ゴム、ナイロン製釣糸、銛となる金属棒と、カエリの部分にする金属片（スプーンやフォークの柄を使うことが多い）、銃身と銛を結合する細引などである。このうちナイロン製釣糸は、1970年代以来、漁村で用いられており、日用品といってもよい。スプーンやフォークは、もっと早い時代から、食事に使われていた。金属棒はめずらしいが、銛やヤスなどの漁

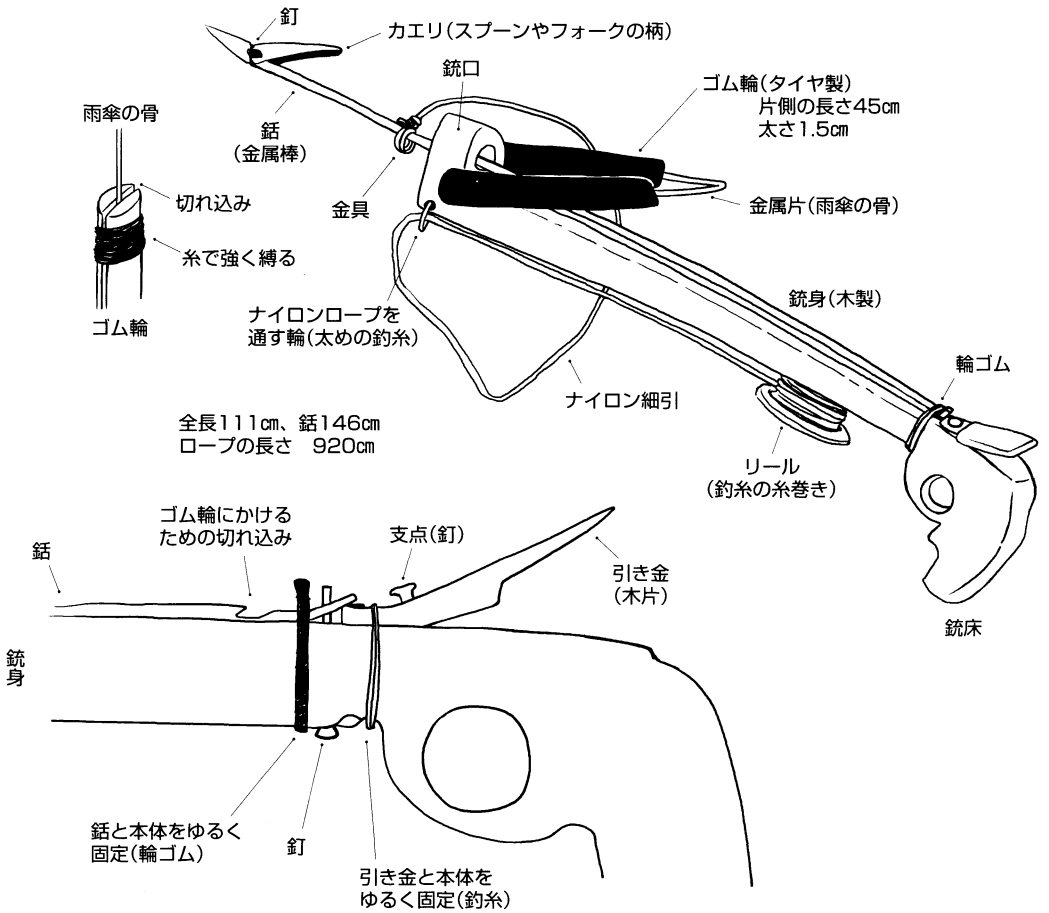

図1 ヴェズ漁師が自作する銛銃

具（刺突具）を作るため、近隣の村の鍛冶屋で鍛造の材料とされてきた。

もっともあたらしい素材は、ゴムタイヤと雨傘だろう。古いゴムタイヤから作ったサンダルはアフリカ地域の村落部で広くみられ［湖中 2007］、F村でも町の市場で買ったものを利用していたが、村人がゴムタイヤでなにかを製作することはこれまでなかった。1998年当時には、地方都市の知人を介してゴムタイヤを入手したようである。雨傘も、雨の少ないこの地域では、銛銃が製作される頃までほとんど見かけなかった。しかし、カラフルな衣装とともにカラフルな雨傘をさすことが、おしゃれと見なされるようになり、地方都市から村落部へと広がった。

つまり、生活でほとんど用いられなかった素材が利用されるようになった背景には、新品や中古品を含むさまざまなモノの地方都市への流入があるのだ。その因果をさらにさかのぼるなら、先進国で一般的な20世紀的大量消費の生活スタイルにたどり着く。漁村ではそうした生活スタイルがほとんどみられず、地方都市でもその恩恵を受ける人びとはわずかだが、世界システムの中核が提示した価値観は、意図せざるか

たちで周縁地域の生活に影響をおよぼしているといえよう。

こうした道具が考案された直接のきっかけは、ゴムタイヤなどの素材に漁師が価値を見いだし、活用しはじめたことである。しかし同時に、多くのヴェズ漁師が日常的に潜り漁や木工作業をおこなってきたことにも、注意をはらっておきたい。潜り漁は、銛銃の需要を高める生活実践であり、銛銃を短期間に普及させるもっとも大きな要因だった。また、木工作業は、カヌー建造や身近な道具製作の場面で役立つ生活実践であり、ヴェズ漁師がみずから銛銃を作りだすためには不可欠だった。若者ですら、子どもの頃の玩具を自分で製作するのに慣れていたため、銛銃を自作できたのである。

これらの生活実践なくしては、銛銃はこれほど重要かつ身近な道具にならなかったかもしれない。あらたな漁具の創造は、人びとが継続してきた生活実践と、それまで知られていなかった新奇な素材との出会いによって、可能になったといえる。

3　漁法開発2：網漁の改良

ゴムタイヤの活用は、銛銃だけにとどまらない。以下の事例は、F村から南に約100キロメートル離れた漁村で、2008年に目撃したものである。この村では、漁網を作るのに、太くて黒い繊維を用いていた。聞いてみると、トラックなどの大型タイヤの層構造をほぐしたものだという。タイヤには細い針金の入った層があり、これを細かく裂いて漁網を作れば、網を傷めやすい地曳網漁[3]にも耐える丈夫なものができあがる。

ゴムタイヤの漁網は、F村では普及していない。F村近くの海ではサンゴの岩礁が多く、地曳網がおこなわれないためである。魚の目にふれやすいタイヤ製漁網は、地曳網漁をおこなわない漁師にとって、それほど有用でなかったのである。このことは、あたらしい漁法が普及する条件として、それに見合った生活実践が必要なことを示している。

F村では、地曳網漁でなく刺網漁[4]に関してさまざまな創意工夫がみられる。そのひとつが、1991年に始まったサメ刺網漁である。この漁で用いられる網は、ふつうの刺網より大型で、100キロを超すサメも捕獲できる。長方形の網の上辺にウキがつき、下辺にオモリがつくなど、ふつうの刺網に似た構造だが、大きな獲物がかかって暴れても逃げないよう、いくつかの工夫がほどこされている。

まず素材だが、市販されているもっとも太いナイロン糸を使ったとしても、サメを捕らえるには心もとない。サメ刺網の網目の目合いは約35センチメートル（結び目から結び目までが約18センチメートル）で、小型刺網の3～5倍もあるため、結び目にかかる負荷はただでさえ大きい。それに加えて、絡まったサメが暴れても切れない強度が必要なのだから、小型刺網よりはるかに頑強な繊維が使われる。サメ刺網漁が始まった1990年代には、ナイロンのロープの撚りをほぐした細引や、使い古した木綿製漁網の断片を束ねたものなどが、サメ刺網を編むのに用いられていた。現在は、ナイロン製の細引や一本化繊で編んだ漁網が市販されているため、自作する必要はない。

それから、長方形の網の頂点を固定する2つのオモリ（アンカー）と2つのウキ（ブイ）が、ひじょうに長いロープで結びつけられていることも特徴である。これは、サメの多い海域が一般に深く、数十メートルから百数十メートルにも達するためである。多くの場合、網の高さは5～8メートルていどなので、ロープが短ければウキが水面まで届かず、設置場所を見失ってしまう。

このように深い場所でおこなう網漁は、サメ刺網漁だけである。したがって、はじめてのサメ刺網漁で漁場や設置方法を決定するさい、小型刺網漁の経験はほとんど役に立たない。むしろ、深海一本釣りでの経験のほうが重要だろう。深海一本釣りの漁場は、サンゴ礁の外側の

深い海で、サメ刺網漁の漁場に近く、大物ねらいの仕掛けにはまれにサメがかかる。F村ではじめてサメ刺網漁をおこなった漁師は、漁師仲間に知られていたサメの習性についての知識をもとに、漁網設置場所を何度も移動させながら捕獲法を体得したという。網のところどころに寄せ餌として魚の切り身を結わえつけたり、生きたサメがかかった場合にまず太い棒を口に挿しこみ、噛みつかないよう処置したりするなど、サメの習性をふまえた知恵は、サメ刺網漁の開始以前にまでさかのぼると推測される。

サメ刺網漁の始まりもまた、あたらしい要素と従来の生活実践の出会いがきっかけだった。サメ刺網漁の場合、あたらしい要素とはゴムタイヤのような新奇な素材ではなく、経済自由化がもたらしたフカヒレ市場価値の上昇だった[飯田 2008：61-64]。大型の刺網で捕ったサメのフカヒレが高く売れると聞き、F村の漁師のひとりが、その刺網を見たことがないにもかかわらず自作した。そして1991年に操業を始め、サメの通り道がわかるようになるまで試行錯誤をくり返したという。つまりこの漁師は、小型刺網の製作方法と、深海一本釣りなどをとおして知られていたサメの習性をふまえていたのである。経済自由化のあたらしい状況と、小型刺網漁や深海一本釣りなどの漁撈実践、その出会いが、サメ刺網漁の始まりをうながしたのである。

4　漁法開発3：イカ擬餌鉤の自作

海産物の商品化と、それにともなう新漁法の開発は、2000年代にも続いた。2003年になると、冷凍漁船が近くの漁村の沖合に停泊し、それまで市場価値がまったくなかったイカ類を買いつけるようになった。このときに始まったのが、擬餌鉤を用いたイカ釣漁である。イカ用の擬餌鉤は、買いつけの冷凍船が持ちこんだ。それまでは、プラスチック製の擬餌鉤でイカが釣れるとはほとんど知られておらず、1998年に筆者がおみやげに擬餌鉤を持っていったときも、釣りには用いられず子どものペンダントに流用されてしまった。

擬餌鉤は冷凍船の乗組員が販売していたが、漁師たちはこれをそのまま用いたりはしない。この擬餌鉤はほんらい、投げ釣り用のリールで水中を泳がせて用いるが、漁師たちはリールも投げ釣り竿も持たないため、針の部分だけをプラスチックから外し、木片で自作した本体につけ直す。針の部分を自作しないのは、多数の尖りが環状に並んでおり（図2）、自作がむずか

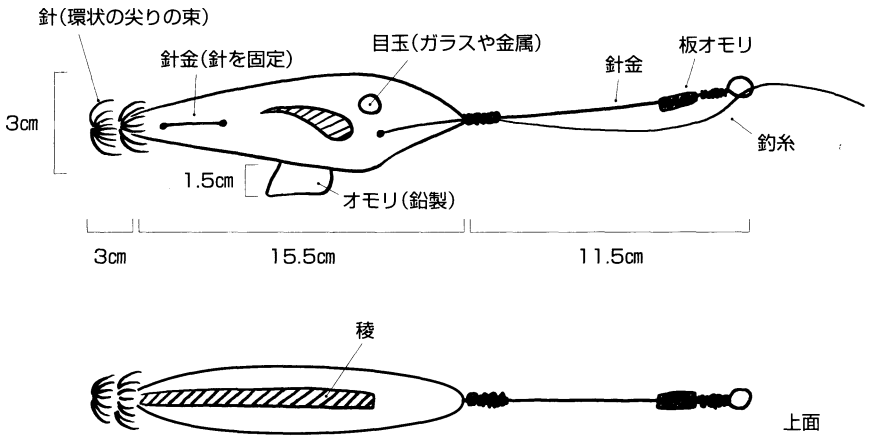

図2　ヴェズ漁師が自作するイカ擬餌鉤

しいからである。あらたに自作した本体は、比重の軽い木でできており、カヌーに結わえて漕艇するだけでも水中を泳ぐため、リールは必要ない。針を本体に固定するにあたっては針金を用い、泳がせるときに回転しないよう鉛のオモリをとりつけ、水中でも目立ちやすいよう明るい彩色をペンキでほどこし、ガラスや金属の目玉を嵌めこむなど、工夫を凝らしている。

これら外形的な工夫は、冷凍船で売られている擬餌鉤を真似たものにすぎない。しかし、見よう見まねではあれ擬餌鉤の製作が定着するためには、少なくとも次の２つの条件が必要だった。ひとつは、日々の漁撈に手漕ぎカヌーが使われており、岸になかなか近寄らないイカの生息海域まで行き来できたこと、もうひとつは、銛銃普及のときと同様、木工作業が生活に息づいていたことである。木工が身近だったことにより、巧みな木片加工に加えて、適切な木材選定もおこなえた。イカ用擬餌鉤の使用は、イカ擬餌鉤という新奇なモノの登場と、冷凍船の買いつけというあたらしい状況、そしてカヌー使用と木工という生活実践の出会いによって、始まり普及するようになったのである。

5　漁法開発４：電灯潜り漁

最後の事例は、2009年にＦ村で聞いたものである。夜間海中に懐中電灯を持ちこんでおこなう潜り漁、いわゆる「電灯潜り漁」が始まっていた。この漁法は、沖縄など南西諸島ではめずらしくないが［太田 1999］、マダガスカルでは完全防水をほどこした懐中電灯が入手しにくいため、夜間は浅瀬でナマコを捕獲するていどだった。夜でも水面下で漁ができれば、昼間に活発だった魚を眠っているあいだに捕獲したり（ブダイ類など）、逆に昼間隠れていた水族に遭遇できたり（ナマコなど）するので、大漁を見こむことができる。

懐中電灯を水中に持ちこむため、漁師たちは、ラテックス製のコンドームを懐中電灯にかぶせていた。コンドームにすっぽり入るような小型かつ照度の高い懐中電灯は、発光ダイオードを用いた白色LEDランプが近年に登場するまで、漁村ではみられなかった。

また、都市でなく漁村にコンドームが出回るようになったのも、それほど古くない。大統領が代わって国際援助が盛んになった、2002年以降であろう。このときに大統領となったマルク・ラヴァルマナナは、かつて社会主義と一党独裁を推し進めたディディエ・ラツィラカに代わり、欧米の企業や援助団体の活動を支援した。そのときに、女性や人口、医療などの問題解決にむけて、さまざまな国際団体が避妊具の普及を奨励したのである。このことの背景には、マダガスカルの人口増加率が全国平均でほぼ３パーセントときわめて高いことがあげられる。

このように電灯潜り漁は、国際援助の一般化というあたらしい状況と、LEDランプやコンドームなど新奇なモノの登場、そして、従来からの潜り漁という生活実践の出会いによって始まったといえる。

Ⅲ　ブリコラージュ実践の共同体（CBP）の諸側面

1　ブリコラージュによる漁法開発

ヴェズの漁法開発は、動力船や大型浮漁礁などの大型設備の導入とは大きく異なる。日本の大型設備導入は、しばしば漁業組合と水産庁、そして製造業者が一体となって進めるが、ヴェズ漁村でそうした事例はまったく見られない。そもそも、誰の工夫で漁法が確立したかさえ明らかでなく、それをつきとめるのもむずかしい。「ものいわぬ漁民たち」は、ひたすら生活向上のために創意工夫を積み重ね、また同業者たちをまねることで、漁法のレパートリーを増やしているのである［宮本 1969, 1973］。この点は、さまざまな分野での創造を専門家が担う現代日本社会と大きく異なる［ギデンズ 1993：42-43］。

新開発の素材や高度な専門的知識を利用せ

ず、日常的に知られた素材や知識をもとに目的（漁獲）を達するという意味で、ヴェズの漁法開発は、ブリコラージュの側面を色濃く備えているといえる［レヴィ＝ストロース 1976］。銛銃や漁網に流用されるゴムタイヤ、そしてサメ網漁に流用される細引、懐中電灯の防水となるコンドームなどは、本来の用途からかけ離れた用途に用いられており、器用仕事や日曜大工といったブリコラージュのイメージによく合致する。漁師たちは、グローバルな物流とともに登場した新奇な素材や道具を前にして、既知の素材や道具に見立てたり［湖中 2007］、あらたな有用性を見いだしたりしながら、新漁法に結びつけていった[5]。

ここで注意したいのは、新漁法の発明において利用されたのが、素材や道具といった可視的なモノにかぎらないということである。個々の漁師が日常の活動をとおして体得した経験もまた、あらたな漁法を編みだすために活用された。たとえば刺網の製作法、木を加工する技能、サメやイカの習性についての知識などである。ヴェズ漁師は、サメが血に集まるという知識をふまえて、魚の切り身をサメ刺網に結わえつける工夫を編みだした。また、イカが視覚によって獲物を認識するという知識をふまえて、擬餌鉤が目立つよう白く塗り、光るものを目玉として嵌めこんだ。

すべての漁法開発は、しかるべきモノと技術、知識の組み合わせによって達成される。そのことを認めるなら、過去の漁撈実践の経験もまた、ブリコラージュの素材と考えてよい。経験の延長上にあらたな漁法が生まれることは、あたり前のようだが重要である。というのは、過去の経験を総動員して状況に応じた漁をおこなうという意味では、毎日のようにおこなわれる漁撈実践のすべてが漁法開発と共通性をもっており、経験のブリコラージュと呼べるからである。このことの含意は、あとでもう一度詳しく述べる。

漁法開発のブリコラージュ的性格は、しばしば、後進性のあらわれと考えられがちである。ヴェズたち自身も、自作した銛銃を「薪でできた銃 *basin-katà*」と自嘲ぎみに呼び、手しごとを貧しさのあらわれだと考えている。たしかに、ブリコラージュが成立するのは、資材がかぎられるなか「もちあわせ」で用をすませようとするからであり、ヴェズ漁村の創意工夫も資材の不足と裏腹であるにはちがいない。しかしここでは、そうした資材不足がもたらすポジティヴな面、すなわち、行政や製造業者に依存することなく、身近な仲間だけで不断に革新を継続していける点を確認しておきたい。

2　集合的現象としての漁法開発

すでに述べたように、ブリコラージュによる漁法開発は、「ものいわぬ漁民たち」によって進められる。このことは、無名の個人が最初の着想を得ることを意味するが、同時に、その後のプロセスで無名の同業者が別の着想をつけ加え、改良をほどこすことも意味する。漁撈に関する着想は、秘匿するのがむずかしいため、遅かれ早かれ同業者の知るところとなり、模倣の過程で改良される。「ものいわぬ漁民たち」の発明は、法律的には発明者（知的所有権保持者）なきものとして扱われるが、実のところ、特殊な技能や知識を共有する漁師たちの集団的な発明なのである［Moran et al. 2001］。

たとえば、F村ではじめてサメ刺網漁をおこなった漁師は、サメ刺網の製作にとりかかったとき、まだその実物を見たことがなかった。大型の刺網を用いればサメを効率的に捕獲できるという伝聞と、彼自身の刺網やサメに関する知識だけを手がかりに、試行錯誤的に漁具と漁法を完成させたのである。この場合、彼がサメ刺網を発明したとはいえないが、いっぽうで、他の漁師の着想をまったく模倣・盗用したともいいがたい。最初の着想がブリコラージュ的である以上、それを模倣するうえではオリジナルを忠実に再現する必要はまったくなく、「もちあわせ」や状況に応じて別のブリコラージュをな

しとげることになる。したがって、新漁法の普及においては、最初の発明の模倣と別の発明が同時に進行するのであり、最初の発明者よりも模倣者のほうが斬新な工夫をこらすことすらありうる。この意味で、ブリコラージュにもとづいた発明は、別の発明をともないながら普及していき、結果的に、集団的な発明という性格をそなえるにいたるのである。

漁法開発が集団的な現象であることは、アフォーダンスの議論にも関わる。ケニア中北部の廃物利用を考察した湖中［2007］は、ブリコラージュ的な廃物利用実践が文化的境界を越えて広く共有されることを指摘した。こうした広範囲の普及が可能なのは、モノのもつアフォーダンスが多くの人の目に明らかだからである。ヴェズ漁村の事例にひきつけていえば、コンドームは液体を漏らさないという物質的属性をもっており、物体を液体から保護することをアフォードするため、懐中電灯の防水素材として認知される［cf. ギブソン　1985：144-146］。ヴェズ漁師たちもまた、素材や道具のアフォーダンスをふまえてその有用性を吟味しながら、あらたな漁法を身につけていくのである。

ただし、ヴェズの漁法開発はケニア中北部の例と異なり、漁師たちのあいだでのみ共有される傾向が強く、普及の範囲にかぎりがある。なぜなら、コンドームはそのアフォーダンスをとおしてすべての知覚主体に働きかけるが、知覚主体がそれを検知してコンドームを活用するためには、知覚主体側の条件も必要だからである［リード　2000：104］。「コンドームはビニール袋よりも防水性が高い」という事実は、「ビニール袋で懐中電灯をくるんでも、海のなかでは浸水してしまう」という過去の経験と照合されてはじめて、「コンドームで懐中電灯をくるめばそのまま海で使えるかもしれない」というあらたな予想を生む［スペルベル／ウィルソン　1999：55-57，130］。つまりコンドームのアフォーダンスは、潜り漁を身近な生活実践とするヴェズ漁師の認知環境では関連性を認められるが、そうでない場合には、無価値にとどまる可能性が高いのである。

ヴェズの新漁法普及は、人間すべてに共通な生物学的認知能力のみにもとづくのでなく、過去の生活実践もふまえた文化的現象である。したがって、ヴェズ漁師たちのあいだでも、あらたな漁法への反応が異なる場合がある[6]。たとえば、ナマコ価格が高騰したとき、F村の漁師たちは240キロメートルも離れた町に出漁し、そこから毎日50キロメートルも沖合の漁場に行って潜り漁を開始した。ところが、出漁先の町のヴェズ漁師たちは、ナマコ漁をおこなおうとしなかった。というのも、町が河口に位置しており、近くの水域は透明度が低く、町の漁師たちは潜り漁の経験をもたなかったからである［飯田　2008：209-210］。反対に、同じような漁法をおこなってきた漁師のあいだでは、共通の漁法にあらたな要素をつけ加えるかたちでの改良が迅速に広がる。いずれの場合も、新漁法の普及が過去の経験に大きく依存することを示唆している。

3　正統的周辺参加

前節の議論では、個人的な経験を他の個人が共有できることを前提としていた。そのプロセスは、実践共同体と正統的周辺参加の議論［レイヴ／ウェンガー　1993］から説明できよう。湖中［2007］もまた、廃材を資源とみなす人びとの集まり（資源共同体）が実践共同体に類似すると示唆している。だが以下で述べたいのは、ヴェズ漁村が実践共同体に「類似する」のでなく「そのものである」ということ、ただし、実践共同体としては特殊な条件をそなえているということである。

正統的周辺参加は、徒弟制による技能習得をもとに定式化された学習過程モデルである。このモデルにおいて、学習者（新参者もしくは徒弟）は、熟練者を中心とした共同体に「参加」しつつ、熟練者たちの活動についての全体像を把握する。ここでいう共同体は、かぎられた数

の人びとの集まりだが、学習を唯一の目的とはせず、メンバー以外の人びとに対するサービスの提供など、異なった活動目的をもつ[7]。その活動においては、熟練者が共同体の中心でリードする（共同体に十全的に参加する）のに対して、学習者は「周辺的」だが、参加によって「正統性」を認められている。学習者は、最初は比較的単純な役割を受けもたされるが、徐々に複雑な役割をこなすようになり、熟練者へと育っていく。これにともない、共同体への参加は、周辺的なものから十全的なものへと深化する。また共同体への寄与も増え、そのことがさらなる学習の動機となり、アイデンティティの実感も増していく［レイヴ／ウェンガー 1993；田辺 2002］。

このような意味での正統的周辺参加は、ヴェズ漁村でも容易に観察できる。ヴェズの子どもたちは、しばしば小学校に就学する以前から、漁や航海に参加する［飯田 2008：219-220］。歩いて磯漁りに行く女性には、多くの子どもたちがつき従う。彼らは必ずしも真剣に獲物を探さず、仲間どうしで遊ぶだけのことも多いが、母親や姉たちと同じコースをたどることで漁に「参加」し、獲物が現れる状況を次第に学習していく。潜り漁師につき従う子どもは、しばしば、カヌーが遠くへ漂流しないよう保持することを任される。網漁師につき従う子どもは、網のあげおろしを手伝わされる。出漁回数を重ねた少年たちは、やがてこれらの作業を卒業し、みずから漁の判断をおこなうようになる。

参加の深まりと学習の進展にともなって、漁師としてのアイデンティティも強固なものとなり、それが漁の動機となっていく。第Ⅱ章1節でみたように、ヴェズのアイデンティティは、まさしく漁の熟達にもとづくからである。また、彼らが漁に出るのは、たんに経済的な動機によるのではない。単価の高い魚を捕ることが期待できなくとも、大潮になって一定の漁獲を見こめるときには、たいていの漁師が海へ出る。それは、漁の喜びを得ると同時に、漁の経験を重ねるためである［飯田 2008：216］。「ヴェズである」という評価に尊敬がこめられていることは［飯田 2008：89］、漁撈に習熟することの動機になっている［飯田 2008：217-218］。

ヴェズの漁撈技術が正統的周辺参加によって習得されるとすれば、実践共同体にあたる単位は何だろう。ヴェズ漁師たちは、さまざまな人びととともに出漁するが、たいていの場合、家計をともにする世帯や家族の一員と出漁する［飯田 2001：99-102］。また、漁撈の目的のひとつは世帯や家族の収入を得ることだから、漁の成否は家族によって評価される。このことをふまえれば、世帯や家族といった小さな単位を実践共同体とみなすのが適当である。しかし、漁の習熟によって強化されるのは、世帯や家族の一員としてのアイデンティティではなく、ヴェズという民族的なアイデンティティである。このようにヴェズ漁師の正統的周辺参加では、実践の単位とアイデンティティの単位が一致しておらず、その点で徒弟制の場合とは異なっている。

こうした場合、どの範囲を実践共同体とみなすのか、論点に応じて使い分けたほうがよいと思われるが、本稿では、空間を共有する村人たち全体を実践共同体の範囲とみなした。これは、正統的周辺参加によって得られる経験を、漁村内部の人たちがかなりのていど共有するという理由による。じつのところ、ヴェズの知識習得は、漁撈実践のみならず、陸上での行住坐臥全般をつうじてもおこなわれる。たとえば、筆者からみて姉貴分的な立場にあった女性が、「カヌーが転覆したらどうするか」と筆者に謎かけしてきたことがある。帆を下ろして帆柱を外すというところまでは筆者にも想像できたのだが、それだけでなく、アウトリガーの腕木も外してから船体を起こし、水を掻い出してからアウトリガーと帆柱を装着しなおす、というのが正解だった。謎かけをしてきた女性も筆者自身も、実際に転覆事故に遭遇したわけではな

い。村落生活にまつわるさまざまな出来事に付随して、こうした情報を交換し、海辺の生活での基礎的な知識を身につけるのである。

したがって、漁撈単位としての世帯や家族を実践共同体とみなすのは不都合である。漁撈チームの構成が日によって少しずつ異なることをふまえれば、なおさらである。また逆に、ヴェズを自称する者全体に範囲を広げてしまっては、メンバーのもつ知識や技術があまりにも多岐にわたるうえ、メンバーが互いを仕事仲間だと認知しないこともある。さらに、学習がはたして正統的周辺参加によってなされているのかどうか、不明確になってしまう。

同じ村に住む者どうしであれば、漁場に関する村人たちの知識も類似したものとなるし、漁撈についての日常会話をとおして「学習」を進めることもできる。このようにヴェズ漁師たちは、物理的空間を共有する者たちとの社会交渉全般をとおして正統的周辺参加をはたすため、漁村を実践共同体とみなすのが妥当だろう[8]。

4　状況対処能力の習得

ここまでの議論で示したのは、第一に、ヴェズ漁師たちの漁法開発が集合的に共有された経験のブリコラージュであること、第二に、経験が正統的周辺参加をとおして共有されていることである。しかし、これだけでは、ヴェズ漁民が新奇な要素を自在に活用できる理由を示したことにならない。なぜなら、徒弟集団などある種の実践共同体は、流動的な状況で存続しづらいと議論されており、ヴェズの漁法開発がグローバリゼーションのもとで活性化していることと明らかに矛盾しているからである。

流動的状況に対して徒弟制が脆弱であることは、福島が明快に示している。流動的状況において、熟練化が途中のレベルで中断され、最初の段階に引き戻されるというのである［福島 2001a：150］。つまり、過去の経験を生かして実践を継続しようとしても、直近の状況が変化するためむずかしく、熟練者は初心者と同じ水準の仕事しかこなすことができない。そして、その時点で一から始めた熟練化も、状況が流動するとまたもや中断され、ふり出しに戻される。それをくり返すうちに、技能の高さと社会的地位の高さが対応しなくなり、徒弟制は崩壊してしまう［福島 2001a：155-167, 2001b：107-116］。徒弟集団とヴェズ漁村との違いを示すためには、ヴェズ漁師が習得することがらの性格を、もう少し詳しく検討する必要があろう。

ヴェズ漁師が習得するのは、まずもって、毎日の漁を遂行するうえで必要な個別の技術や知識である。釣漁や網漁、潜り漁に関する身体技法や、魚の名まえや習性、漁場となる海域や海底地形の詳細、カヌーや漁具の使いかた、作りかたなどがこれにあたる。木工に関わる知識や身体技法なども、広く漁撈に関わるものとして、ここに含めてよい[9]。これらの一部は、漁法開発においてブリコラージュの素材となるが、まずは日常的な場面で役立てるべく習得される。

しかし、そうした個別の道具だてだけでは十分とはいえない。じっさいの漁においては、経験にもとづいて得られた無数の技術・知識のレパートリーのなかから、周囲の状況に合うものを選びだし、組み合わせる能力が必要である。

たとえば、航海中に帆の一部が強風で破れた場合、漁師は、舵とりを調整して帆と風の角度を変えたり、帆の一部を縛ったりして、破損部に力がかからないよう対処をほどこす。風向きが変わらないかぎり、破損が拡大していくからである。このとき、舵を調整する技術やそれに応じて帆の位置を調整する技術、また縛りかたについての知識などが、経験の「道具箱」からとり出される。ただし、状況に合った技術や知識はわずかである。２本のロープを縛る方法は役にたたないし、風が強ければ、簡略な縛りかたでは強度が低い。破損部位の場所や大きさ、布の厚さなどによって、適切な方法はかぎられる。

また、舵とりや帆の調整によって風の受けかたを変えれば、縛りかたや必要な強度も変わってくる。つまり、「道具箱」からのとり出しかたのほかに、複数の「道具」の組み合わせかたも、適切でなければならない。そうした事情を瞬時に判断する能力が、状況の対処には重要である。

このように状況をふまえた選択と組み合わせは、漁のプロセス全体をつうじて必要である。漁においては、天候や海況、魚の行動、協働するメンバーなどの条件が毎回異なり、場合によっては刻々と変化するため、同じ漁法を用いたからといって、厳密に同じ漁が2度以上くり返されることはない。釣針に魚がかからなかった場合には、別の漁場へ移るか、水深を測りまちがったと考えて糸の長さを調整するか、あるいは狙う魚種がいないとあきらめて仕掛けを替えるか、判断する必要がある［飯田 2004］。漁場を移る場合には、その日の魚のふるまいや潮流をふまえつつ、海底地形の知識なども動員して、どの漁場に移るのが適当かを決定しなければならない。このように手もちの技術や知識を状況に応じて選択し組み合わせる能力は、新奇なモノを漁撈に活かす着想を生み、あらたな漁法開発につながる。

漁撈にかぎらず、実践と名づけうるあらゆる行為には、ある種の状況判断能力が必要である。しかし、漁撈におけるその重要性は、ことさらに強調されてよい。このことを、徒弟集団における技術習得と比較してみよう。福島［2001b：15-36］によれば、実践におけるルーティンには「ミクロの事件」がつきもので、理想的な進行（核）からの脱線や復帰（振動）をくり返しながら展開していくという。いっぽう漁撈の場合には、刃物を研ぐルーティンなどと違って振動の幅が広く、反復によって学んだ身体動作だけでは振動を解消できない。むしろ、まったく別の場面で得た経験や知識に頼りつつ振動を収束させ、それができない場合には別のルーティンに乗り換えなければならない。たとえば強風によって帆が破れた場合、帆を縛る強度を無限に高められない以上、舵や帆の調整もあるていど必要である。

漁撈のように振動の多いルーティンは、むしろ多数のルーティンの束というべきで、振動の少ないルーティンとは次元の異なる複雑さを備えている。あるいは、単純なルーティンでは「核」の部分の習得が相対的に重要であるのに対し、漁撈など複雑なルーティンでは「ミクロな事件」への対処が相対的に重要といってもよい。対処のしかたは「ルーティン化」されておらず、その場の状況や漁師の経験によって異なる。したがって、ある漁法に習熟するには、その漁法だけを単独に反復しても不十分で、他の漁法をはじめ、海上や海中におけるあらゆる実践に習熟して経験を積む必要がある。また、他の漁師の経験談を自分の経験に照らして消化することも重要である。そのようにして得た幅広い「経験」が、漁撈のシークエンスにおける「ミクロの事件」を収束させるのに役立つのである[10)]。

ヴェズ漁師たちは、少年期のあいだに何百～何千回と漁をくり返して無数のレパートリーを身につけ、そのことによって、直面したことのない状況にもあるていど対処できるようになる。そして、とくに幅広い経験をとおして複雑なルーティンを習得した者は、ヴェズ漁師のあいだで、「本当のヴェズ」として賞賛を受ける。このことも、ヴェズの正統的周辺参加における状況判断能力の重要性を示していよう。ここでいう複雑なルーティンの代表は、サメ刺網漁とウミガメ漁である［飯田 2008］。これらの漁場は陸地からもっとも遠く、いくら時間をかけても獲物に遭遇する機会がまれであるため、慣れない漁場での判断を不断に要求される。いわば、幅広い経験にもとづいた状況対処能力をとくに要求する漁法なのである。

このようにヴェズ漁師の実践共同体では、個別の技術や知識以上に、それらを状況に応じて適切に選択・配置＝ブリコラージュする能力が重要である。毎日の漁におけるこの状況対処能

力は、単純なルーティンを個別に習得する実践的共同体ではほとんど重視されない。このため以下では、ヴェズ漁村のように正統的周辺参加をとおして状況対処能力が得られるような実践共同体をとくに「ブリコラージュ実践の共同体(Community of Bricolage Practice、以下CBPと略)」と呼び、他の実践共同体と区別する。この区別は、以下で示すように、現代のグローバリゼーション状況でとくに大きな意味をもつ。

Ⅳ　グローバリゼーションのただなかのCBP

1　グローバルなフローを資源とする自己組織

第Ⅱ章でみたさまざまな漁法を短時間のあいだに編みだす能力は、前節で述べたように、一回一回の漁における「ミクロな事件」を収束させるために手もちの経験を選択・配置する状況対処能力によく似ている。とくに、モノや事象のアフォーダンスをふまえるという側面は、まったく同一といってよい。

帆が破れるという事態に直面した漁師は、帆とそれを固定するロープ、風の流れのアフォーダンスを吟味しながら、それぞれが当座の状況のなかでどのように移動・変形していくか考え、必要な調整を加える。この操作は、タイヤやコンドームといった新素材、あるいは獲物の行動といったモノや事象のアフォーダンスを吟味しながら、漁獲という最終目的に結びつける操作と異ならない。漁法開発というある種の発明は、毎日の漁撈において発揮されるブリコラージュ能力にもとづいているのである。

このように不断のブリコラージュの実践がみられるCBPは、他の実践共同体と異なって、グローバリゼーションの状況に強い親和性を示す。なぜなら、グローバルなフローに乗じて共同体に到達した新奇なモノや情報は、すぐさま漁師のブリコラージュ能力をとおして文脈化され、自家薬籠中のものとなるからである。ゴムタイヤやコンドームの活用は、その一例である。また、流通の変化にも敏感で、海産物の商品化とともに漁法のレパートリーが増えていくため、マクロ経済や資源状況の変化にも比較的柔軟に対処できる。

もちろん、CBPにおいて、すべての者がひとしく幅広い状況に対処できるわけではない。ある者は、少年期にさまざまな漁を経験するうち幅広い状況対処ができるようになり、近代的な素材を利用した道具を発明して、効率的な漁法をおこなって経済的にも社会的にも成功する。いっぽう他の者は、特定の漁法のみをくり返し、何とか生活を支えるていどである。しかしこうした者も、生涯をとおして同じ漁法だけに関わるのではなく、ときには他の者が発明したあたらしい漁法を試み、成功すればそれを続ける。けっきょく、両者の違いは革新的か保守的かということではなく、あらたな漁法を試す頻度が多いか少ないかに帰せられる。同じ漁法を比較的長く続ける漁師も、状況をみながら漁法を選ぶ点で、他の漁師と大差ないといえる。

ふたつのタイプの漁師があると仮定したとき、重要なのは、進取にすぐれた漁師だけが経済的に成功するのでなく、他の漁師もそれなりの利益を得るということである。このため、進取にすぐれた漁師は、同業者から賛美を受けて自己実現を達成する。そのことをとおして、CBPの価値観は維持・強化されるのである。結果的に、CBPの外から漁撈にとり入れられた道具や素材、情報などは、CBPの自己再生産の資源となり、各メンバーの自己実現の手段となる。すなわち、ヴェズ漁師のCBPは、グローバルなフローをとり入れながら再帰的に自己組織をはたすオートポイエーシス・システムなのである(本特集の湖中論文を参照)[11]。

CBPのメンバーは、不断に漁撈実践の内容を更新し、そのことによって、次世代の学習内容も変化する。それにともない、CBPのありかたや内部の社会関係も変化するが、技能向上を社会的地位向上に結びつけるメカニズムは維持される。このようにしてCBPは、グローバ

リゼーションが駆動するモノや情報のフローを自己再生産の資源とし、流動的な状況にも適応していく。この点でCBPは、グローバリゼーションが日常生活に浸透した現代において、共同性を維持・創出していくためのモデルと考えられよう。

2 CBPをおびやかすグローバリゼーション

しかしながら、CBPは、グローバリゼーションがもたらすどのような状況にも耐えられるわけではない。流動性が極端に高まった場合には、ヴェズ漁師のCBPも存続が危うくなると予測できる。

たとえば、石油資源開発や国立公園化によって、付近の海岸で自由な漁ができなくなり、そのかわりにあらたな収入機会が与えられると仮定してみよう。これは非現実的な仮定ではなく、世界中の狩猟採集民が直面している事態であり［岸上 2009］、マダガスカルでも現実になりつつある［Tucker 2007］。こうした場合、ヴェズのCBPがうまく存続をはかれるのは、あらたな収入機会が海の仕事に関わる場合にかぎられる。たとえば、観光客をカヌーに乗せるガイド業や、海中調査のためのスキューバ潜水などに多くのヴェズが従事できれば、ヴェズ漁師が蓄積してきた経験をさまざまな場面で生かせるため、従来どおり海に関する経験の習得が社会的地位向上に結びつく。つまり、たとえ漁撈ができなくなっても、漁撈をとおして得られた熟練があるていど社会的に意味をもつなら、正統的周辺参加の大枠は維持され、CBPは存続する。

しかし、そうした熟練に関係ない職種、たとえば油田労働者やホテル従業員といった職種にヴェズ漁師たちが就かざるをえなくなれば、ヴェズ漁師の経験が生きることはほとんどない。そこでは、あたらしい職種に適応できる若者たちが社会的に成功していくが、その状況対処能力は、海での経験蓄積をふまえた状況対処能力とはまったく異質である。したがって、海の達人は若者に対する発言力を失い、価値観もアイデンティティも従来どおりでなくなる。若者は、共同体の知恵に頼るのでなく、外とのつながりを強めることで変化を乗りきろうとする。

いっぽう、知識やノウハウを共同体の外からとり入れる傾向が強まれば、漁撈が存続した場合でも、CBPの存続は危うくなるだろう。ギデンズ［1993］のいう専門化システム（漁場調査や気象予報など）や機器類（動力エンジンや魚群探知機など）は、熟練度の低い者にとっても有用であり、その意味で、ブリコラージュを必要とする経験的知識や技術よりも完成度が高い。こうした専門家システムや機器類は、実地経験と組み合わさなくては役に立たないとはいえ［レイヴ／ウェンガー 1993：84-85］、経験の重要性を相対的に低減させてしまう。機器に頼って漁場を決め、機器に頼って漁をすることが常態化すれば、ブリコラージュ的な機転で同業者を出しぬくことも、それを同業者がまねることも、そのことによって発明者が賞賛を受けることも、次第にみられなくなっていく。こうして価値観やアイデンティティを確認する機会が減れば、CBPは共同体的な性格を失っていく。

このように、グローバリゼーションとともに作用する「脱埋め込み化」［ギデンズ 1993］に対して、CBPは無限定に耐えうるわけではない。これは、CBPが実践共同体の一形態であることに由来する限界である。福島［2001a：155-156］が述べるように、実践共同体においては「熟練形成のトラジェクトリーがその組織内の社会的地位とパラレル」であり、その条件が整うのは「きわめてまれな歴史的事態」である。CBPの場合は、熟練形成のトラジェクトリーが固定的でなく、流動的な状況でもかたちを変えて存続する。その意味で、たんなる実践共同体よりも幅広い歴史的条件に適応しうるが、それは社会的地位の秩序が熟練形成と結びつくかぎりにおいてである。この条件がそこなわれると、共同体への全人格的な参加は「社

会的に割りが合う」［福島 2001b：159］ものでなくなり、CBPが維持できなくなってしまう。CBPは、経験をとおして状況変化に対処できるが、その経験を維持するコストが大きくなれば、消滅を余儀なくされるのである。

V　むすび

本稿ではCBPの概念を定式化するとともに、グローバリゼーション状況においてCBPがみせる柔軟性と限界を検討した。第Ⅱ章では、マダガスカルのヴェズ漁村における漁網や擬餌鉤の改良、銛銃の発明、電灯潜り漁の始まりなどの事例を報告し、グローバリゼーションの進展にともなって登場した新奇なモノが盛んに流用されていることを示した。第Ⅲ章ではこれらヴェズの漁法開発を「集合的に共有された経験のブリコラージュ」としてとらえ、そうした経験が日常的な漁撈実践における正統的周辺参加をとおして得られることと、漁撈の状況に応じて経験を選択し組み合わせる能力が漁法開発にも応用されていることを示した。このことをふまえ、状況対処能力の習得をともなう実践共同体をCBPと定義した。

最後に第Ⅳ章では、あらためてCBPとグローバリゼーションの関わりをまとめた。CBPは、新奇なモノや情報の価値を見さだめることを得意とするため、グローバリゼーションのもたらす流動性にも柔軟に対処しうる。しかし、グローバリゼーションが専門家システムや機器類をCBPに普及させる場合には、CBPの存続はむずかしいと予測される。

CBPという概念は、もともとはヴェズ漁村社会の動態を説明するための道具立てだったが、グローバリゼーションという状況が広くみられる今日、さまざまな視角の研究に意味をもってくると思われる。その見とおしをまとめることで、本稿のむすびとしたい。

第一に、CBPという理念型は、グローバリゼーション状況下で共同性を回復するための大きなヒントとなる。「二重社会論」という表現で小田［2009］が示したように、コミュニケーションが地球規模にまで拡大した近代社会であっても、真正な社会関係を維持することは可能である。しかし彼自身が別所で論じるように、現代では、人間関係のとり結びかたまでもが個人化される結果、自分らしさや個性の追求が自己喪失につながるという逆説も生まれている［小田 2007］。こうした状況において、外部からの影響を反照しながら発展する共同体の研究は、時代的な要請をともなうといってよい。そうした一連の研究では、他の地域におけるCBPを検討したり、他の再帰的な伝統社会[12]をCBPと比較したりする作業が求められよう。

第二に、自然資源を利用する村落社会は、CBPの性格を伸ばすかたちで村落発展をめざすべきだと筆者は考えている。CBPの意識的な維持の是非は、個別に検討すべきではあるが、こと自然資源に依存する社会では、技術や知識が世代を超えて継承される半面、新技術の導入にも積極的で、CBPの性格が強い［内藤 1999；金 2000；卯田 2001］。くわえて、持続的な資源利用が求められるため、大がかりな機器導入や効率重視の発展にはなじまないことが多い[13]。つまり、科学知よりも、ブリコラージュ的知による資源利用の発展が望ましい。こうした社会では、CBPの性格を助長させ、実践知をふまえつつ近代的な機器や素材を取捨選択していくのがよい。これによって、その社会はあるていどの資材不足に留めおかれるかもしれないが、ローカルに根ざした生態知をつうじて、集約的・持続的な資源利用が期待できる。

第三に、職人の世界をはじめ多様な実践共同体でも、CBP的なつながりを整える可能性が検討されてよい。これらの共同体のなかには、近代的な大量生産システムによって熟練にもとづく「生産」（芸能など無形物の上演も含む）がおびやかされている場合が少なくない。「生産」そのものを近代化しなくとも、デザインや素材にあたらしいセンスをとり入れるだけで、

現代では話題となり市場が広がることがある。とくに、手しごとによる付加価値が認められているような分野であれば、近代化でなくCBP化していくことで、技術革新やマーケティングの恩恵を受けられる可能性がある。さまざまなプロセスを一人の職人がこなす強みによって、生産のこまめな変化にも対応しうるはずである。また、マーケティングなど、職人が関わりたがらないような専門知がCBPをつうじて普及する[14]という副次的効果もある。

共同体の未来を左右しかねない点ばかりを指摘したが、むろん、共同体側の意見や歴史的経緯も尊重しなくてはならない。一方的な権力行使を避けることは、文化人類学のこれまでの議論をふまえれば、当然である。しかしそのうえで、他者の共同体と関わる場面があるならば、同じ地球に生きる者として、よりよい関係をめざしたいというのが筆者の思いである。

注

1）本稿ではとくに共同体に焦点を当てたが、より広い意味での共同性については、さまざまな文化人類学的議論がなされている。これは、個人を代替可能なものと見なすグローバルな諸制度の限界をふまえ、個人の具体的はたらきかけをとおして活性化する結びつきやまとまりの可能性が模索されている証しであろう。本文で示した2つの本誌特集のほか、「中間集団の問題系」［真島 2006］や「アカウンタビリティの人類学」［森田 2009］などの特集も、こうした点を異なる視角から論じている。

2）松田は、のちの論考で「グローバル化時代における共同体の再想像」を試みるが［松田 2009a］、前作［松田 2004］と異なってレヴュー的な性格が強く、人びとの生活実践をふまえた議論にはなっていない。

3）岸近くの水中に広げた漁網を陸上から曳きあげ、囲った魚を一網打尽にする漁法。

4）目立たない漁網を海中に張り、泳いでくる魚を絡めとる漁法。

5）「計画ができると彼ははりきるが、そこで彼がまずやることは後向きの行為である。いままでに集めてもっている道具と材料の全体をふりかえってみて、何があるかをすべて調べ上げ、もしくは調べなおさなければならない。そのつぎには、とりわけ大切なことなのだが、道具材料と一種の対話を交わし、いま与えられている問題に対してこれらの資材が出しうる可能な回答をすべて並べ出してみる。しかるのちその中から採用すべきものを選ぶのである」［レヴィ＝ストロース 1976：24］。

6）タイヤを利用した地曳網漁がF村で普及しなかった理由は、漁師たちが地曳網漁の経験をもたなかったためというよりも、F村の漁場が地形的に地曳網にむかないためといったほうがよい。この点は、ナマコ漁を受け入れなかった漁師の場合とは異なる。

7）従来から用いられてきた「共同体」という語にまつわるニュアンスを払拭するため、実践共同体はしばしば実践コミュニティと呼びかえられる［田辺 2002］。

8）季節的に別の村へ移動して漁をするヴェズ漁師もいるが、これは、季節的に別の実践共同体に帰属しているとみなすことができよう。実践共同体への重層的帰属をめぐる議論については、松田［2002］を参照。

9）正統的周辺参加によって習得される以上、これらの技術・知識は、習得時の状況やその後の経験と不可分であり、一回一回の漁撈の記憶と結びついている。つまり、ヴェズ漁師の技術や知識は、マニュアル化されたノウハウや教科書の化学反応式などと異なって、定式化されていないといえよう。

むろん、どのような状況でも試みるべきマニュアル的な手順はあるが、そうした手順も、経験にまつわる特定の状況を完全に拭いさってはいない。大村［2007］によれば、カナダ極北圏のイヌイトが狩猟をおこなううえでは、「身体図式」（身体の姿勢と運動の連鎖についての記憶）によって、経験と結びついた手順を思い起こすという。たとえば、目の前のホッキョクグマを射止めようとする猟師は、ホッキョクグマが突進してくればとにかく逃げださなければならず、その危険が低いときにも、出かたをまちがえれ

ば反撃にあう。そこで、過去にホッキョクグマを射止めたときの記憶を想起しながら、みずからの身体的な活動をとおして、ホッキョクグマ（およびその他の環境）と自分との関係を調整するのである。そのときに想起されるのは、けっして、心的表象のようなものではない。

10）ただし、対処の場面において、漁師は過去の経験すべてを想起するわけではない。もしそのようなことをすれば、関連性理論が予測するように、情報処理が膨大になって決断できなくなるだろう。関連性理論によれば、聞き手が話し手の発話を文脈化するさい、まず直前の発話の解釈に関する情報（assumption）を参照したのち、そこから遡って、①それ以前の演繹過程で参照されたり派生したりした情報、②発話そのものや発話の文脈に関する百科事典的情報、③発話の場面で観察できる周囲の環境についての情報、などを参照するという［スペルベル／ウィルソン 1999：169-171］。もしこの理論が漁撈場面における人と環境の相互作用にまで拡張できるなら、釣漁において魚が釣れなかった場合、①その日の漁の始まりからその瞬間までに想起したりあらたに判断したことがら、②釣漁や対象魚などに関してそれまでの経験で得た情報、③判断の場面で観察できる周囲の環境についての情報、などを参照しながら、次の行動を判断することになる。

11）つけ加えれば、新奇なモノや状況を資源として自己再生産をはたすとはいえ、ヴェズ漁村はアノミー状態からほど遠い。各家庭の生活財の点数はかぎられており、簡素といってよいほどである。アルコールによる問題も、近隣の民族グループほど深刻ではない。これまでのところ、新奇なモノを前にしたヴェズ漁師たちは、必要なものだけを積極的に生活にとり入れてきたようだ。少なくとも、新奇なものを無秩序にとり入れるようなことはせず、日常世界をグローバル状況と対話させながら、漸進的かつ継続的に変えてきた。変化のめまぐるしい世界のなかでは、まれな例であるように思える。

12）サーリンズは、制度や規範が行為を規定する傾向が強い社会を規定的社会と呼び、逆に行為が社会関係を創造する傾向が強い社会を遂行的社会と呼んで、理念的対照とした［サーリンズ 1993：6-9，49-53］。現代における「伝統的」社会は、サーリンズが遂行的社会の例としてとりあげたハワイ社会のように、伝統的な意味や関係性を一面では変化させつつ、一面では再生産させて同一性を保っていると考えられる。

13）関［2009］によれば、フィリピンの漁村に資源管理レジームが浸透するとき、漁師たちは状況依存的に可能な資源利用形態を生みだすという。したがって漁師の裁量を最大限に発揮させることと、資源を持続させていくことは、究極において矛盾するものではない。

14）ギデンズは、近代では特定分野の専門家が知識をつかさどるとしたうえで、それら専門家が専有した知識を日常生活のなかで再専有していく「フィルター・バック」過程があると論じた［ギデンズ 1993：180-181］。ここでは、個人でなく共同体が知識を再専有する意義を指摘したが、この問題はより深く掘りさげる余地があろう。

参照文献

ASTUTI, Rita

1995 *People of the Sea: Identity and Descent among the Vezo of Madagascar.* Cambridge University Press.

福島　真人

2001a「状況・行為・内省」『実践のエスノグラフィ（状況論的アプローチ 3）』茂呂雄二（編）、pp. 129-178、金子書房。

2001b『暗黙知の解剖――認知と社会のインターフェイス』金子書房。

ギブソン、ジェームズ J.

1985 『生態学的視覚論――ヒトの知覚世界を探る』古崎敬ほか訳、サイエンス社。

ギデンズ、アンソニー

1993 『近代とはいかなる時代か？――モダニティの帰結』松尾精文、小幡正敏訳、而立書房。

GRANDIDIER, Alfred et Guillaume GRANDIDIER

1908 *Ethnographie de Madagascar, tome IV.* Imprimerie National.

飯田　卓

2001 「マダガスカル南西海岸部における漁家経

済と農家経済――生業と食生活の分析から」『国立民族学博物館研究報告』26（1）：79-129。
2004 「マレーシア東海岸における小規模漁民の経営と漁種選択」『地域漁業研究』44（3）：1-22。
2008 『海を生きる技術と知識の民族誌――マダガスカル漁撈社会の生態人類学』世界思想社。

金　柄徹
2000 「漁民の身体技法――伝統的「わざ」と先端テクノロジーの併用」『民族学研究』65（2）：123-145。

岸上　伸啓（編）
2009 『開発と先住民（みんぱく実践人類学シリーズ 7）』明石書店。

KOECHLIN, Bernard
1975 *Les Vezo du sud-ouest de Madagascar: Contribution à l'étude de l'éco-système de semi-nomades marins*. Mouton.

湖中　真哉
2007 「小生産物（商品）の微細なグローバリゼーション――ケニア中北部・サンブルの廃物資源利用」『躍動する小生産物（資源人類学 4）』小川了（編）、pp. 25-62、弘文堂。

レイヴ、ジーン／エティエンヌ・ウェンガー
1993 『状況に埋め込まれた学習――正統的周辺参加』佐伯胖訳、福島真人解説、産業図書。

レヴィ＝ストロース
1976 『野生の思考』大橋保夫訳、みすず書房。

真島　一郎
2006 「序――中間集団の問題系」『文化人類学』71（1）：22-23.

松田　素二
2002 「石工職人の世界における技能とアイデンティティ――東アフリカ・マラゴリ人職人の事例から」『日常的実践のエスノグラフィ――語り・コミュニティ・アイデンティティ』田辺繁治、松田素二（編）、pp. 309-336、世界思想社。
2004 「変異する共同体――創発的連帯論を超えて」『文化人類学』69（2）：247-270。
2009a 『日常人類学宣言！――生活世界の深層へ／から』世界思想社。
2009b 「序――現代世界における人類学の課題」『文化人類学』74（2）：262-271。

宮本　常一
1969 『日本の子どもたち／海をひらいた人びと（宮本常一著作集 8）』未来社。
1973 『日本を思う（宮本常一著作集 15）』未来社。

MORAN, Katy, Steven R. KING and Thomas J. CARLSON
2001 Biodiversity Prospecting: Lessons and Prospects. *Annual Review of Anthropology* 30: 505-526.

森田　敦郎
2009 「序――「アカウンタビリティ」と目に見える世界の探求」『文化人類学』73（4）：499-509。

内藤　直樹
1999 「「産業としての漁業」において人－自然関係は希薄化したか――沖縄県久高島におけるパヤオを利用したマグロ漁の事例から」『エコソフィア』4：100-118。

小田　亮
2004 「共同体という概念の脱／再構築――序にかえて」『文化人類学』69（2）：236-246。
2007 「現代社会の「個人化」と親密性の変容――個の代替不可能性と共同体の行方」『日本常民文化紀要』26：188-156。
2009 「「二重社会」という視点とネオリベラリズム――生存のための日常的実践」『文化人類学』74（2）：272-292。

大村　敬一
2007 「生活世界の資源としての身体――カナダ・イヌイトの生業にみる身体資源の構築と共有」『身体資源の共有（資源人類学 9）』菅原和孝（編）、pp. 59-88、弘文堂。

太田　好信
1999 「ミーカガン――沖縄県における潜水漁（3）」『魚まち』24：12-15。

リード、エドワード S.
2000 『アフォーダンスの心理学――生態心理学への道』細田直哉 訳、佐々木正人監修、新曜社。

サーリンズ、マーシャル
1993 『歴史の島々』山本真鳥訳、法政大学出版局。

関　恒樹
2009「グリーン・リベラリズムとエイジェンシーの共同体――フィリピンの海域資源管理の事例から」『文化人類学』73（4）：477-498。
スペルベル、ダン／ディアドレ・ウィルソン
1999『関連性理論――伝達と認知　第2版』内田聖二ほか訳、研究社。
TUCKER, Bram
2007 Applying Behavioral Ecology and Behavioral Economics to Conservation and Development Planning: An Example from the Mikea Forest, Madagascar. *Human Nature* 18：190-208.
田辺　繁治
2002「日常的実践のエスノグラフィ――語り・コミュニティ・アイデンティティ」『日常的実践のエスノグラフィ――語り・コミュニティ・アイデンティティ』田辺繁治、松田素二（編）、pp. 1-38、世界思想社。
卯田　宗平
2001「新・旧漁業技術の拮抗と融和――琵琶湖沖島のゴリ底曳き網漁におけるヤマアテとGPS」『日本民俗学』226：70-102。
植村　清加
2004「私たちの差異ある〈つながり〉のかたち――フランス・パリ郊外におけるマグレブ系移民第二世代の多民族的共同体」『文化人類学』69（2）：271-291。

（2010年3月22日採択決定）

The Community of Bricolage Practice

Appropriation of Global Flows among Vezo Fishermen in Madagascar

IIDA Taku

Keywords: habitus and practice, legitimate peripheral participation, community, fishing, Madagascar

Faced with the neoliberalist discourse that ignores social bonds other than individuals' link to the market, some anthropologists appreciate the role of face-to-face communities as a facility for social insertion. However, as GIDDENS (1990) argues, the globalizing modernity tends to "disembed" local relations. This paper discusses, based on the case of Vezo fishing communities in southwestern Madagascar, how a rural community can open out to exterior and global influences that might be violent. It also conceptualizes the community of bricolage practice (CBP) as a rather promising model of face-to-face community today.

Throughout the 1990s and 2000s, Vezo fishermen kept on improving their household economies by inventing various gears and techniques: handmade wooden spearguns with curved car tires and umbrella ribs as parts; dragnets made of metal wires from car tires; extraordinarily large gillnets to fish sharks; handmade wooden lures for squids; a combination of a condom and a light-emitting diode torch to enable night diving. Those inventions, triggered by a national and international increase in seafood demand, owe to the bricolage process in two phases: the phase of the initial trial, where the fishermen improvise the techniques out of their

professional experience and new materials conveyed along the global distribution currents; and the phase of spreading, where imitators improve the new gears and techniques by modifying the model to their own circumstances and availability, e.g., "*moyens du bord*" (LÉVI-STRAUSS 1962).

The imitation of the latter spreading phase happens frequently soon after the initial trial, because the fishermen share, to a significant degree, the basic know-how of fishing through legitimate peripheral participation (LPP; LAVE and WENGER 1991). In actuality, the Vezo fishing village is regarded as a community of practice (CP; *ibid.*), for the people learn fishing from co-villagers through everyday conversations, as well as from their families through fishing trips. The village cannot be a typical CP because the fishermen, through practices, achieve their *Vezo* identity but not a *village* identity. Nonetheless, because the theory explains sufficiently why the degree of learning relates to social estimation, the paper regards the village as a CP.

The Vezo fishing village is distinct from many other CPs in that the learner masters not only knowledge and body techniques but also how to get through unexpected incidents. That means that fishing is not such a simple practice as sharpening knives, for example, where the practitioner tries not to deviate from the regular routine by adjusting his own slight motions; but it is rather a complex practice, or a bundle of routines, where the practitioner has to control the unpredictable developments by intentional calculation. In actuality, the fisherman never repeats any fishing trip in a strict sense; but he always experiences an unprecedented trip each time under a unique combination of weather, current, tide, fish behavior and trip members. Thus, he has to make a unique decision if he harvests nothing after a while: to make a move for better water; to adjust the length of line for a better depth; or to change gears for other targets. That unique decision cannot be learned through LPP, which instead gives lessons regarding how to judge conditions quickly based on conditional experiences. After the judgment, he selects items from his repertoire of know-how and available materials, and combines them according to the unique conditions. In other words, he practices bricolage on every fishing trip. That ability turned out to be the source of creativity in the 1990s and 2000s, when the fishermen were confronted with new materials and opportunities, resulting in a bricolage invention of gears and techniques. It was just an exercise of fishermen's normal abilities under new conditions.

We can define a CBP as a CP where the members learn how to manage unprecedented conditions through LPP. In such a community, the more the circumstances change, the more the members show their creativity, trying to manage the new conditions. That is not the case theoretically with such CPs as apprentice systems, where the skilled, in a fluid condition, cannot enjoy the advantage of being accustomed to a certain practice condition, and come to lose their social reputation eventually. The apprentice system is thus vulnerable to the fluid conditions that are general in a globalization moment. A CBP, contrarily activated by fluid conditions, can be a promising kind of face-to-face community in a globalization moment.

However, the CBP cannot survive all the global waves. We can simulate the end of the Vezo CBP in two ways. First, if the fishermen stop fishing or working on sea completely, the Vezo ability to manage conditions on sea cannot function anymore. As a result, old skilled fishermen lower their voices, and the order built by LPP collapses. Second, if the less-skilled fishermen catch up with the more skilled using such high-tech equipment as electric devices, the bricolage ability turns out to be less useful. The learning in the community becomes less necessary, and the individuals come to respect information from the outside rather than from the skilled, resulting in the collapse of the CBP. We can therefore say that the CBP is reproduced only when the level of bricolage skill corresponds to that of social reputation, which is the nature of all CPs, including CBPs.